

埋もれた金目の偉人に光

民権家・猪俣弥八 親族宅から資料

明治期の金目に生まれた自由民権家で、米国人日本人娼家排斥運動を主導した猪俣弥八(1868～1902年)。地元から遠く離れた渡航先で早逝してから、長らく埋もれていた弥八の功績が、このほど子孫の猪俣立字さん宅に残された資料から明らかになった。NP法人「兩岳文庫を活用する会」の岩崎隼さん(75)が協力した。

弥八は16歳で西洋の思想を学ぶため単身渡米。人種差別の色濃かった現地で、日本人外交官と在米邦人の就労支援に取り組んだ。現地では日本人娼家排斥運動の旗手としても知られ、死後には追

悼誌が作られた。岩崎さんは「半ば前、金目村の自由民権家・宮田眞治が眠るクリスチャン墓地(南倉目)を調査していたところ、弥八の死後に家族が建てた墓碑の存在に気付いた。偶然墓参りに訪れた親族と出会い、謎めいた弥八の生涯に興味を持つたという。弥八の兄・國治を曾祖父に持つ猪俣立字さん(66)は、「父が弥八さんに関する資料を大切に保管していた。追悼誌が出てきたけれど、英語や昔の言葉で書かれていて解読が難しく、よく分からないままだったと話す。追悼誌のほか、蔵から出てきた手紙などの現代語



猪俣弥八

訳を岩崎さんが買って出ると、弥八の人物像が明らかになった。岩崎さんは「志半ばで倒れた弥八の思いが伝わってきた。皆に知ってほしい」と調査を続ける。

タウンレポート

金目から渡米 猪俣弥八の生涯

日本人娼家排斥運動などで活躍



弥八の死後届いた写真や追悼誌

明治期の自由民権運動が盛んだった金目に、大志を抱いて単身渡米した青年がいた。猪俣弥八(1868～1902年)は、現地外交官の伴新二郎らと共に在米邦人の生活支援に力を注いだほか、日本人娼家排斥運動を展開。現地誌に取り上げられるほどの存在だったが、35歳で強盗に銃殺された。河内住でNP法人「兩岳文庫を活用する会」の岩崎隼さん(75)や親族の研究により存在が明らかになった。

猪俣弥八は明治元年の3月、金目の農家の次男として生まれた。大磯の叔父の家に泊っては花街遊びに繰り出す若者だったという。そんな弥八を羨ましがキリスト教の教士が、「ただ無為に生きるのではなく、人のため、何かを成し遂げるために生きる」という教義は、放浪生涯を送っていた弥八に衝撃を与えた。1886年には「金目の民権トリオ」として知られる宮田眞治、猪俣運之輔ら7人と共に渡米。西洋の学問に触れ、リトやロックなどの啓蒙思想家の書物を廣く読み、米国民権を志した。

1888年2月、貨物船で渡米。その資金どうし面しかは不明だが、船の中で働きながら海を渡った親族に伝えられている。現地高校に通った後、オレゴン州米学に入学。日米人の就労支援に取り組んでいた伴に共感し、伴が経営する鉄道建設会社「伴商會」に入社した。ワシントン州の支部長を任せられ、友人乗艇の祝いを料亭であげた際には「弥八は、渡米の抱負を以って『墓参り』だった」と追悼誌で語られている。弥八が積極的に取り組んだ活動として、日本人娼家の排斥運動がある。明治

期に白米でも布教活動を行ったハリ牧師の指導によるもので、反発する動きもあったため、十勇士を尊り娼家を置く家を、隣業を迫った。教宗と娼家を置く、取り返しに来たきりさかいになつたともあり、命の危険を冒してまで活動する弥八の姿は誌面を時んだ。現地の雑誌に取り上げられるほどだった。信を授け奔走する弥八を銃弾が襲ったのは1902年5月。銀びね船号300トンを引き出したところを、埠頭の労働者に狙われ、銃殺された。

約10年後、金目の家族の元に遺書と写真、卒業証書と共に訃報が知らされた。弥八の死を伝える日新新聞の切り抜きや追悼誌、領事館からの手紙も届いたことから、現地日本人にとっても弥八の死が衝撃的だったことが伺える。弥八の子孫にあたる猪俣立字さん(66)は、「家族の間でもよく分からなかった弥八さんの人生が浮かひ上がった。本人も約10年越しに注目され、ひろく知られるのでは」と目を細めていた。岩崎さんは「生まれてから、素晴らしい活躍をしたのだと思うと悔しい。弥八の存在を伝えたい」と話していた。